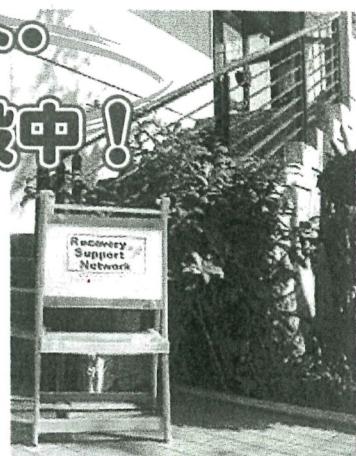


リカバリー・サポート・ネットワーク開設中!



全日本遊技事業協同組合連合会（以下全日遊連）は、2003年4月に「依存症研究会（現ぱちんこ依存問題研究会）」を発足させ、“ぱちんこへの過度のめりこみ（ぱちんこ依存）”に注目し、その対応を検討してきた。パチンコ業界として具体的に何ができるかを議論してきた結果、第三者機関「リカバリー・サポート・ネットワーク」を今年4月19日に設立した。企画段階から参画し、同ネットワークの代表を務める西村直之さんに「パチンコ依存問題」の現状を聞いた。

—パチンコの依存問題に取り組まれるようになったきっかけをお聞かせ下さい。

アルコール依存や薬物依存の人たちの回復支援を行うなかで、パチンコの周囲で深刻な問題が生じながらも、問題への介入窓口が皆無に等しいことに、強い危惧（きぐ）を感じていました。アルコールや薬物の長期使用は、比較的分かりやすく特徴的な身体や精神の症状が出現するため、依存の問題として医療、福祉、そして最近は司法も認知しています。しかし、ゲームやパチンコなどへの依存は、問題が生じて始めて表面化するものの、本人も周囲の人たちも依存という“病的なめり込

み”が根本にあることに気がついていないか、気づいていても対応するための知識や情報を持っておらず、問題が深刻化する傾向を持っています。

そのような折、全日遊連が、依存問題を扱う依存症研究会を立ち上げ、ギャンブル依存の回復支援施設、ワンデーサポートから「具体的な対応案で困っており力を貸してあげては」と声をかけてもらいました。

アルコール・薬物依存の当事者や家族の回復支援で得てきた知識と経験が、パチンコの依存で生じる問題への介入に役立てばと思い、今回のプロジェクトを企画し、代表を引き受けました。

—リカバリー・サポート・ネットワークを開設されるまでの道のりはどうでしたか。

パチンコ業界内には、競馬、競輪などの公営ギャンブルが何も依存問題の対策をしないのに、なぜ自分たちだけが世間の批判を浴びてまで、この問題を取り組まねばならないのかという意見もあります。依存問題の矛先がホール業界にだけ向いている現状では、すんなりと賛成とはいえないのは、いたしかたないところでしょう。

しかし、この企画を進める中で依存問題研究会の方々は、健全な娯楽へ回帰させなければ、業界とユーザーとともに未来がないとの強い危機感を持っていました。

ホール業界、ギャンブル依存の回復支援施設、医療、司法、福祉、マスコミ、パチンコユーザー、一般の方々の問題を眺める視点や関わる接点が違えば、言葉も考え方も異なります。この企画を実現させていく上で、言葉や考え方の違いによる誤解、摩擦、偏見を新たに生み出さないようにすることに留意しています。

—依存症に心当たりのある方は、不安を持って電話されると思います。主な相談内容とその相談後の反応をお聞かせ下さい。

電話相談は、本人と家族が半々といった感じです。借金を繰り返してもまたパチンコに行く、止めたいが止められない。借金に追われて、どうしているのか分からぬ。やめる方法、やめさせる方法の問い合わせとお金の不安に関する相談が中心です。

相談電話でお話を伺ったからといって、すぐにパチンコ依存問題が解決するわけではありませんが、まず問題を外に持ち出し、問題を整理し、地域の相談先を知ることで、まずは不安と混乱が解消し、少し落ち着かれるようです。

—大衆娯楽としてのパチンコの魅力をお聞かせ下さい。

人が生活していく上で、娯楽は欠かせない要素の一つです。身近で気楽な娯楽として、北から南まで、都会の駅前から山間の村まで、これほど広く浸透している娯楽は、他に類を見ないものです。戦後の復興と発展を大衆とともに歩んできたパチンコは、日本で生まれ、日本で発展した独自の娯楽文化です。大衆から目を背けられぬ、優しく健全な娯楽である限り、パチンコは日本の娯楽文化の核をなし続けると思います。



相談窓口

相談専用ダイヤル

050-3541-6420

(IP電話のため通話料がかかります)

月曜日～金曜日(祝日は除く)
10:00～16:00

ホームページ

[http://www.geocities.jp/
rsnokinawa/index.html](http://www.geocities.jp/rsnokinawa/index.html)